

# 廻向成就の信

寺川俊昭

一

少くとも『歎異抄』によるならば、法然以来の伝承として、親鸞が浄土真宗における信仰的自覚を「如来よりたまわりたる信心」と了解し、かつ語っていることは周知の事実であろう。この信仰理解は、およそ浄土真宗における本願の信の特質を鮮明に明らかにしたものととして画期的意義をもつものである。衆生に発起する信心が、それにもかかわらず衆生に根拠をもつものではなくて、「賜わりたる」ものとして衆生に超越的な根拠に由来するということこの了解は、実は既に古く『涅槃経』が阿闍世の廻心を「無根の信」と語ったことにあい応じて、いわゆる他力の信といわれる信仰的自覚の面目を鮮明に表白して、まことに体験的である。しかも『歎異抄』がいわゆる信心一異の諍論の中で伝えるこの「如来よりたまわ

りたる信心」という言葉には、生きた信仰の対話における一種の間髪を入れぬような響きがあつて、まことに具体的であり、かつ説得的である。その意味で信仰のみずみずしく端的な表現として貴重なものであるけれども、法然から伝承したこの信仰の了解は、しかしながら敢えていえば一つの問題性を孕むものであることが、指摘されるのではあるまいか。それは信仰をこのように表現した場合、そこには信を賜う如来と、賜わる我と、この二元の対立が暗々裡に前提されていることである。法然のこの極めて説得的な信仰理解を伝承しつつ、しかもそれが孕む問題性を突破して、信仰がそれ自体に満足するところ、透明な本願の信の自覚に根源化していったところに、親鸞の聞思の創造性と厳密性があつたといふべきであろう。このようにして獲得された親鸞の独自の信仰理解が、『教行信証』に「阿弥陀如来の清淨願心

の回向成就したまふところ」の行信という、極めて厳密な表現で語られている了解であった。だから、普通に廻向の信としばしば語られている、親鸞の信仰的自覚の特質を積極的に知ろうとするならば、この「もしいは行もしは信、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまふところにあらざることあることなし。」という表現において親鸞が語っている自覚内容に、どうしても尋ね入らなければならないのである。

一一

本願の信の発起について、「信卷」別序は、

「それおもんみれば、信樂を獲得することは如来選択の願心より発起す。真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顕彰せり。」

と、その因縁を語る。これについて私は第一に、「真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顕彰せり」という、信心発起の縁について語る言葉に注意したい。衆生における本願の信は、必ず釈尊の教説との値遇を縁として発起する。一体、如来としての釈尊の大悲は、一切苦悩の群生海のために教えを説くところに満足するのであるが、そのことは、親鸞によって釈尊の出世本懷を明か

すと了解された、『大無量寿経』自らが語る通りである。もとよりこの釈尊の教説は、ただに例えば『大無量寿経』というように、仏説の形式における教えに止まらず「正信偈」が、

「印度西天の論家 中夏・日域の高僧 大聖興世の正意を顕はし 如来の本誓、機に應ぜることを明かす。」と讃詠するように、三国の歴史を通して七祖の論釈として伝承され、行証されているのであって、親鸞の透徹した択法眼によるならば、「西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈」はそのままに、根本教説である『大無量寿経』の歴史的展開であり、七祖のいかなる教説も、その歴史的現実には「本願為宗・名号為体」の『大無量寿経』であったというべきであろう。だから、「大聖矜哀の善巧」と親鸞が語る時、もとよりそれはこのような歴史的現実を踏まえて了解されなければならぬ。

今『歎異抄』によるならば、親鸞はその立つ決定的な立場を、

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。」

と、師教との値遇として端的に表白する。凡そこの言葉

は、師教への帰依の純潔なるものを表現して、その典型といわれるべきものであるが、果して親鸞は「真宗興隆の大祖」と仰いだ法然房源空の一門徒として生涯を貫いたことは、彼自らが記す通りである。この「ただ念仏」とは、法然の出世本懐というべき選択本願の念仏であることは、言を待たまい。とするならば、「ただ念仏せよ」との師教の密意は、偏に本願に願ぜよというに外ならず、「ただ念仏せよ」の師教に「偏に本願を聞け」との発遣を聞き当てたところに、親鸞の聞思の鋭さがあり、またそこに浄土真宗という親鸞の独自の精神界が開する立脚点があったというべきであろう。してみると親鸞がこの師教との値遇によって獲得した廻心を、「雑行を棄てて、本願に帰す」と表白したのは、極めて自然である。

親鸞が直接触れた教説は、このように聞かれたよき人法然の仰せに外ならないが、法然の教説の核心である、選択本願の念仏をもって往生浄土の正定業とする念仏往生の教えとは、根本にさかのぼって源を尋ねれば、念仏はいわば「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらずべし」という自分の言葉をもって、根本教説である『無量

寿経』の念仏往生の教えを表白したのであった。その意味でこの法然の仰せは、そのままに『無量寿経』の歴史的现实に外ならない。そしてこのよき人の仰せに遇うて、親鸞は初めて尽十方無碍光なる世界に蘇ったのであるが、そこに「師教の恩厚」という、深い謝念と共にのみ語り得る事実があるとすれば、この師教の恩厚はそのまさに「大聖矜哀の善巧」と一つであったのである。親鸞が信心発起の縁として、

「真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顕彰せり。」

と記す時、それはこのような意味で根本教説である釈尊の『無量寿経』と、その等流である法然の仰せという、歴史的展望をもってうなづかれた真実教との値遇を語っているに外ならないのである。そしてこの感動的光景が既に『無量寿経』そのものに、いわば値遇の原光景として、

「十方恒沙の諸仏如来、皆共に無量寿仏の威神功德の不可思議なるを讚嘆したまふ。諸有衆生、その名号を聞きて信心歓喜せむこと乃至一念せむ。」

と教説されているのであり、この経言に触れたことが、恐らくは親鸞の『無量寿経』を読む眼を開いたに違いな

いことが思われる。

三

「敬ふて一切往生の知識等に白さく、大きにすべからく慚愧すべし。釈迦如来はまことにこれ慈悲の父母なり。種々の方便をして、われらが無上の信心を發起せしめたまへり。」

「信巻」所引の善導のこの文は、境遇が無上の感動であることを、くっきりと浮彫にしている。全く同質の感動が、親鸞が、

「ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月氏の聖典、東夏・日域の師釈に、遇ひ難くして今遇ふことを得たり。聞き難くして已に聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、ことに如来の恩徳の深きことを知んぬ。」

と表白する時、そこに溢れているのであり、そしてこの感動の大きさが、『大無量寿経』が、

「如来の興世は値ひ難く見たてまつり難し。諸仏の経道も得難く聞きたてまつり難し。菩薩の勝法・諸波羅蜜も聞き得ることまた難し。善知識に遇ひ、法を聞き能く行ずる、これまた難しとなす。もしこの経を聞

きて信樂受持せんこと、難中の難、この難に過ぎたるはなし。」

と、繰り返し「難」を語るその「難」の実質というべきである。だから真心即ち眞実信心というても、最も具体的には、このような眞実教との境遇の挙体的感動として現前した自覚に外ならない。その意味で、親鸞が「眞実の信樂実」に獲ること難し」と語るのは、端的にはこの境遇がまことに容易ではないことを踏まえているのであって、このことは十分に注意されなければならないであろう。

ところで「願成就の文」は、無量寿仏の威神功徳を讃嘆する諸仏善知識の教えとの境遇を、「聞其名号」という一句をもって語っている。そのみならずこの『大無量寿経』は、聞名という意味深い言葉をしばしば繰り返し語って、「称南無阿弥陀仏」あるいは「執持名号」と称名を勧める『観無量寿経』、乃至は『阿弥陀経』と際だった対照を示している。この聞名という意味深いでき事のもつ意味については、既に「親鸞の名号本尊」(『大谷学報』第五十四卷、第一号所収)において私見を述べたことであるが、南無阿弥陀仏という如来の名号に、十方の諸仏善知識の称讃を聞くと、前述の『歎異抄』第二章

の伝える親鸞における師教との値遇の意味に外ならず、また聞名としてそのでき事が自証されていることは、『無量寿経』の經体を仏の名号とする親鸞の了解に、よく対応していることである。十七願の意をこのように尋ね当てたことは、それだけで既に極めて独自の了解であるが、親鸞の強毅な思索は更に根源にさかのぼって、聞名とうなづかれる感動と謝念とに満ちたでき事において聞かれる名の意味を、如来そのものの名告りであると決定的に把握したのであった。それが即ち、名号解釈の金字塔にも比すべき、親鸞の歴史的な名号釈であった。

「しかれば南無の言は歸命なり。(中略)ここを以て歸命は本願招喚の勅命なり。発願回向といふは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり。即是其行と言ふは、即ち選択本願これなり。必得往生といふは、不退の位に至ることを獲ることを彰はずなり。經には「即得」と言へり、釈には「必定」と云へり。即の言は、願力を聞くに由りて、報土の真因決定する時刻の極促を光闡せるなり。必の言は(中略)金剛心成就の貌なり。」

名号が確かにこのように把握された限り、その名号を聞くところに開かれる信心、いい換えれば真実教との値

遇の挙体的感動は、より根本的に、名号に喚び覚まされた自覚という、決定的な刻印を打たれたことになる。今は今、『歎異抄』冒頭の感銘深い一句、「念仏まふさんとおもひたつころのおこるとき」を想起するのであるが、この発起する心こそ人間を念仏者と転成する跳躍台であり、この一句のところには、よき人法然の念仏往生の教えに値遇して念仏者として蘇った親鸞の、まさしくその転成の一点が、「称無碍光如来名」と鮮明に浮彫りされているのである。ところが今、この名号釈において親鸞がある断言的な確かさをもって語るのは、念仏申さんと思ひ立つ心の発起と、そくばくの業をもちける身をたすけんと思し召したつ本願の発起とは別ものではなく、称無碍光如来名と迸り出る一心歸命と、至心信樂欲生我国と叫ぶ願心とは一つであるということではなかつたろうか。

われわれは決して見落してはならない。「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべし」との恩厚なる師教に値遇した親鸞は、自力の心をひるがえし棄てるという挙体的な感動と目覚めの中で、初めて無碍光如来のみ名を称する者として蘇ったのだということ。この値遇において、身は念仏者として転成した親鸞の内面に噴出した

感動の自覚内容は、端的に一心帰命尽十方無碍光如来であったに違いない。今尋ねた、衆生の帰命と如来の欲生我國の願心とは一つだとの親鸞の了解を踏まえて、「大行とは則ち無碍光如来の名を称するなり」との千鈞の重さをもつ言葉を想起しつつ、私は親鸞が念仏を語るその自覚内容は、かつて世親が美しい偈頌をもって表白したあの、

「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂國」  
であると断言したい。あるいはむしろ、『大無量壽經』願成就の文に、「聞其名号」と象徴的に語られる師教との値遇の原光景が、まさにその『無量壽經』の教説によって無碍光如来に帰命した菩薩世親の信仰告白として、『願生偈』に表白されていることを、親鸞は深い感銘と共に読み取ったというべきであろうか。いうまでもなく願成就の文の教説の歴史的証言としてである。

一心帰命とは、勿論如来への帰依の純潔なるを表わす表白である。がその深意は、偏に尽十方無碍光なる如来によって生きる私の誕生を告げるものであると、私は敢えて了解したい。いい換えれば、我執においてある我に死して、如来においてある我を獲得したとの廻心であり、かつ凱歌であるとの意をもつ表白であるということであ

る。いわば虚妄なる我を転じて、真に主体であるものの確立を告げる表白である。のみならず、この一心帰命の心はただに如来への帰依に止まることなく、必ずや更に願生安樂國の心として相続する。そこに「信に死して願に生きよ」といわれるように、偏に如来に依って生きる者の積極的な生き方が展開する根拠が確保されるのであるが、その全体が世尊の教えに値遇した賜物である。恐らく親鸞はこのような世親の一心帰命の表白に開眼されて、法然との値遇において自ら帰した念仏の自覚内容の眞実義を、やがて了解したに違いない。

#### 四

肝腎なことは、「聞其名号信心歡喜乃至一念」という事実が、本願の成就と了解されていることである。それに基いて世親の一心帰命の表白も、世親における本願成就の信心の表白に外ならないと了解されて来た。その意味は、衆生における信心の発起は大聖矜哀の善巧の賜物であると共に、より根源的にその衆生に発起する信心そのものが、本願が衆生に事実として実現したものに外ならぬということである。われわれは例えば善導の二河譬において、本願が西岸上よりの招喚の声に譬えられてい

るのを知っている。この譬えによるならば、本願は彼岸からの声に譬えられる。流転の迷いの中にある衆生に、目覚めよ、直ちに本国浄土に還れと喚びかけて止まぬ声に譬えられている。これは発遣の声に遇うた端的に、根源からの招喚の声の響流するを聞き当てた経験を語っていかにも生々しいのであるが、もしこの二河譬によるならば、信心とはこの招喚の声に喚び覚まされた目覚めと了解することができよう。いわゆる本願に喚び覚まされた自覚。本願の信の特徴的性格を、われわれは極めて体験的にこのようにうなづくことができるのである。

けれども、私は先に親鸞の名号釈において、衆生の帰命と如来の願心とは一つだとの了解を尋ねることができた。してみると、今この信心についても、それが本願に喚び覚まされた自覚という経験のうなづきよりもより根源的に、本願が衆生の信心として現前していると自証されて来ることとなる。既に親鸞は信心について、「この心即ちこれ念仏往生の願より出でたり」と、信心が願心に根拠をもつことを明確に指摘しているのであるが、近く曾我量深先生も『本願の仏地』において、「宗教的信が、内に展開する願の世界」という命題のもとに、信が信自身のはたらきとしてその根拠を内親し、そこに願

心を見出すのであると、衆生の信心と如来の願心とが別ものでないことを浮彫りにしておられる。このような特質をもつ本願の信、即ち名号に帰して開示された信仰的自覚を、「もしは行・もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまふところにあらざることあることなし」と、如来の願心の回向成就の事実であると鮮明に決定し、そしてその根拠を明らかにしたのが、「問ふ。如来の本願、已に至心・信樂・欲生の誓を發したまへり。何を以ての故に論主一心と言ふやと。」の問いに始まり、

「信に知んぬ、至心・信樂・欲生、その言、異なりといえども、その意これ一つなり。何を以ての故に、三心すでに疑蓋雜はることなし、かるがゆへに真実の一心なり。これを金剛の真心と名づく。金剛の真心、これを真実の信心と名づく。真実の信心は、必ず名号を具す。名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり。この故に論主、建めに我一心と言へり。また如彼名義欲如実修行相応故と言へり。」

に終る、いわゆる三心一心の問答であった。眼前の事實は、一心帰命の心の発起である。世親は確かに、世尊の『無量寿経』の教説に値遇して獲得した自

覺を、「世尊、我れ一心に尽十方無碍光如来に帰命して、安樂國に生れんと願はず」と表白した。この自覺を世親における本願成就の信心と了解した親鸞は、この一心帰命の信心をあの如来の願心、即ち「たとひわれ仏を得たらむに、十方の衆生、心を至し信樂してわが國に生れむと欲ふて乃至十念せむ、もし生れざれば正覺を取らじ」と表わされる本願の心と一つであると尋ね当てたのであった。願心と信心と、この二つは二つであって別のものではない。ある根源的な、法界に周遍し未來際を尽くすような広大難思の心を、如来にあっては願心と呼び、衆生に発起しては信心と呼ぶ。この驚くべき信仰理解が探り当てられた時、浄土真宗はその積極的内容を十分に持つことができたのであったのではあるまいか。

一心帰命の一心と、至心信樂欲生我國の三心と、この二が同一であるというこの了解による限り、われわれは「設我得仏」の「我」と、「世尊我一心」の「我」とを、別ものと考えることができぬ。根源の願心の主体である我は、今世尊の教えに賜わった願生心の主体である我として、ここに現行している。一心帰命する我の根源的主体は、実は願心の主体に外ならぬ。このように尋ねてくると、衆生に発起する一心帰命の主体は、まさしく

菩薩法蔵と呼ばれなければならぬことに気づくのである。私は今、かつて曾我量深先生が、「如来我となりて我を救い給う」との感得を得られ、更に「如来我となるとは、法蔵菩薩誕生の謂なり」と喝破せられたことを想起す。もしこの視点に立つならば、「信巻」に展開せられた三心一心の問答とは、親鸞における法蔵菩薩の自証に外ならぬことを、われわれは知るのである。果して親鸞は本願の三心の願意を尋ねる時、あの『大無量壽經』に教説せられる菩薩法蔵の発願と修行とをもつてするのであった。

「仏意はかりがたし。しかりといへども、竊かにこの心を推するに、一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心なし、虚仮諂偽にして真実の心なし。ここを以て如来、一切苦惱の衆生海を悲憫して不可思議兆載永劫において菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、一念一刹那も清淨ならざることなし、真心ならざることなし。如来清淨の真心を以て円融無碍不可思議不可称不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心を以て諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に回施したまへり。則ちこれ利他の真心を彰はす。かるがゆへに疑蓋雜はることなし。



この至心は則ちこれ至徳の尊号をその体とせるなり。」  
この至心積において、親鸞は『大無量寿経』勝行段の  
教説によりつつ、如来の至心の願意を尋ね行く。そこに  
虚仮不実の衆生心とくっきりと対比して、如来の清淨真  
実の願心が浮き彫りにされている。全く同質の対比、即  
ち衆生の虚妄性と如来の真实性との対比が、信楽積・欲  
生積を一貫して続くのであるが、親鸞の「竊以」の聞思  
において至心・信楽・欲生の本願の三心が、疑蓋無雜の  
真実の一心に帰結し、直ちにそれが一心帰命の衆生の一  
心として現前する。このような間髪を入れぬ勢いを、私  
はこの三心一心の間答に感ずるのである。それについて  
私は第一に、真実として如来の至心を明かす至心積にお  
いて、それが至徳の尊号を体とするという解釈に注意し  
たい。

「廻心といふは自力の心をひるがへしすつるをいふな  
り」。親鸞は『唯信鈔文意』にこう語る。私は前に、教え  
との値遇即ち聞名において名号に帰した出来事を、挙体  
の感動と了解した。この出来事を今もし廻心と呼ぶなら  
ば、この挙体の感動はむしろ挙体的懺悔である。私が名  
号に帰したとは、実は名号が私において名告ったことに  
外ならない。そのすがたが、五体投地の懺悔である。そ

こには、穢悪汚染の私がある。虚仮諂偽の私がある。無  
明海に流転し、諸有輪に沈没する私がある。衆苦輪に繫  
縛せられた私がある。虚仮雜毒の善を行ずる私がある。  
煩惱海に流転し、生死海に漂没する私がある。一言でこ  
れをいえば、自力の執心に立って如来に背く私がある。  
私の虚妄性と罪悪性とは今一挙に白日のもとに露わとな  
り、ある圧倒的な力をもって私を大地にひれ伏し、懺悔  
せしめたのである。「自力の心をひるがへしすつる」と  
は、「わがみをたのみ、わがごころをたのみ、わがちか  
らをはげみ、わがさまざまの善根をたのみ」(『一念多念  
文意』)わが身が、今初めて罪の身として翻し棄てられた  
のである。この大地にひれ伏した私の身に、帰命尽十方  
無碍光如来の一心帰命の信が、名号の現行として発起し  
ているのであった。このような廻心懺悔として、如来の  
真実心は今現前したのである。

この真実心である願心の主体は、菩薩法蔵の名で表わ  
される。この法蔵菩薩を物語る『大無量寿経』の教説に  
よるならば、法蔵とは値仏の縁によって無上菩提を求め  
る志願を起こした、求道心の主体に外ならない。私はひ  
そかに思う。帰命尽十方無碍光如来と、一心帰命の心が  
私に発起するについては、求道の長い道程において、そ

の意識にさえ上らぬ深い根底のところ、求道の根本主体である清浄真実の願心と、私の自我の執心との戦いのあったことを。その戦いの光景を、勝行段の教説はわれわれに告げているのではあるまいか。

「ここを以て大経に言はく、『欲覓・願覓・害覓を生ぜず、欲想・願想・害想を起さず、色・声・香・味の法に著せず、忍力成就して衆苦を計らず、少欲知足にして染・患・癡なし。三昧常寂にして智慧無碍なり。虚偽諂曲の心あることなし。和顔愛語にして意を先にして承問す。勇猛精進にして志願倦きことなし。専ら清白の法を求めて、以て群生を恵利しき。三宝を恭敬し、師長に奉事しき。大莊嚴を以て衆行を具足して、もろもろの衆生をして功德成就せしむ』とのたまへりと。」

象徴的な物語りとして語られるこの法蔵菩薩の修行とは、親鸞が大信心と讃嘆し、廻向成就の信と自証した、衆生にとって全く異質の清浄真実の心が、衆生に発起する因位の光景である。衆生がどんなに惨めな存在であり、また卑小な存在であろうとも、あるいはむしろその頑なで卑小な自我の執着心との熾烈な戦いを展開しながら、求道者の精神界の深い内面において、願心はかくも堂々

と歩んで行くのではないか。その戦い勝った凱歌として一心帰命の大慶喜心は今私に発起したのであり、同時にそこに戦い敗れた逆誘の屍骸として、尽十方無碍光のもとに自我は罪障の身を五体投地して懺悔したのであった。その光景を私は『曇鸞讚』の讃歌に、今改めて感銘深く聞くのである。

無碍光の利益より

威徳広大の信をえて

かならず煩惱のこほりとけ

すなわち菩提のみづとなる

罪障功德の体となる

こほりとみづのごとくにて

こほりおほきにみづおほし

さはりおほきに徳おほし

名号不思議の海水は

逆誘の屍骸もとゞまらず

衆悪の万川帰しぬれば

功德のうしほに一味なり

行信を如来の清浄願心の廻向成就とした親鸞の了解に導かれて、私は本願の信の面目をここまで尋ねてきた。

それは衆生に発起する一心帰命の信心は、願心の廻向成就に外ならず、その意味で衆生の一心帰命と如来の至心信樂欲生の清浄なる願心とは一つであるという、独自の積極的な信心の理解であった。このような驚くべき信仰理解を、親鸞以外の誰が語り得たであろうか。勿論親鸞は、法然から伝承した「如来より賜わりたる信心」という表現、あるいは同様の、「如来の至心を以て諸有の一切煩惱悪業邪智の群生海に回施したまへり」、「如来苦悩の群生海を悲憐して、無碍廣大の浄信を以て諸有海に回施したまへり」、さらに「この故に如来、(中略)利他真實の欲生心を以て諸有海に廻施したまへり」という表現をもって、いわゆる如来廻向の信を語っている。もとより私は、このような表現を求めた信仰的自覚のリアリティーについては、十分に承知している。それを共に同じ親鸞が、まさに親鸞独自の信仰理解として、繰り返し言及したあの願心の廻向成就の信心という表現のもつ積極性に、十分の注意をしなければならぬと思う。尽十方無

碍光如来が本願成就の如来であると同じく、帰命尽十方無碍光如来の信心もまた、本願の成就した事実である。

この二つは対応しつつ本願の信の自覚内容となり、この一心帰命の信仰的自覚は、自らの由って来った根源として、如来の願心を内観しているのである。本願の信をこのように尋ねることによって、私は初めてそれが二種深信、殊に機の深信という意味深い信知をその自覚内容とする所以を、了解することができたように思う。

さて改めて問えば、如来の願心は「嘆仏偈」あるいは「重誓偈」には、

「吾誓いて仏を得んに、普くこの願を行じて、一切の恐懼に、為に大安を作さん。」

と表わされ、あるいは

「我無量劫に於いて、大施主となりて、普く諸の貧窮を救はずば、誓いて正覺を成ぜじ。」

と語られている。この願心を憶念しつつ、私はここに世親菩薩の『願生偈』の表白を聞きたいと思う。

「世尊、我一心に、尽十方無碍光如来に帰命して、安樂国に生れんと願ず。」

「何等の世界にか、仏法功德の宝ましまさぬ、我願はくは皆往生して、仏法を示すこと仏の如くせむと。」

「我論を作り偈を説きて、願はくば弥陀仏を見たてまつり、普く諸の衆生と共に、安楽國に往生せむと。」  
如来の願心の表明と世親の願生心の表白と、閉目開目してこれを憶念する時、この二は完全に二重写しとなり、二つの心は二つであってしかも一つであるのを感じる。

世親は自らの一心帰命の願生心として、如来の願心を自証し、如来の願心はここに世親の願生心として現前している。一切苦悩の群生海をこのような願生心の主体と転成しつつ、如来清浄心の廻向成就たる眞実信心は、われらに発起するのである。

### たまわりたる主体

たまわるということは主体が知るのですけれど、また、たまわるということを知る主体もやはりたまわったものである。そういう二重の主体の関係なんです。

ただなにかが廻向されたというのでない、自己が廻向されるのです。主体の廻向なんです。なにかのものをたまわったというのでない、たまわることを受け取る自己がたまわったのです。こういう構造です。これがつまり、たまわりたる主体性というものです。そういう意味で、ただ、ものというよりも、性というものです。開かれるといふ意味があるのは、それは、目覚めるといふことです。目覚めずにたまわったのでない、性に目覚めるといふことがたまわったのです。性に目覚めるような自覚が廻向されたということです。つまり、主体性の自覚です。そういうのが、廻向心、廻心というものでないかと思えます。

(安田理深著『自然と人間』より)